

## アクスム（エチオピア北部）の遺跡について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柘植, 洋一 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/2759">http://hdl.handle.net/2297/2759</a>

# アクスム（エチオピア北部）の遺跡について

柘 植 洋 一

## 1. はじめに

1993年5月16日、アジス・アベバのボレ空港を定刻の7時30分に出発した、エチオピア航空のアクスム行き飛行機は1時間半後にティグレ州の州都メケレにとまり、更にそこから20分でアクスム空港に到着した。長い間夢に見ていたアクスムは、ずいぶんと殺風景な所だというのが第一印象であったが、これはどこでも空港のある場所はそんなものなのである。ただ、内戦の際のものであろうか、滑走路に飛行機の残骸がそのままに放置されてあったので余計にそんな気がしたのであろう。それに、私としては、エチオピアの古典語であるゲエズ語を学んで、アクスム王の碑文を読むようになって以来、20年以上あこがれて来た土地であるから、なんとなく他所とは違う、違っているはずだという思いこみがあったのである。

でも、「ああ、やっと来たな。」という感慨が次第にわき起こってきた。エチオピアの碑文にはアジス・アベバの国立博物館とサナア（イエメン）の国立博物館でお目にかかっていたが、*in situ*で見ることができるのである。あの巨大なステレも。ただ、現実には日程の関係で、急いでアジス・アベバに戻らなければならない事情もあり、この感慨にひたってゆったりとアクスムを見ることはできなかった。何とか次の機会には近郊の遺跡まで足を延ばしてみたいと思っている。

ここでは、この短い実地体験を基にしながら、エチオピアからエリトリアに連なる高原地帯に栄えた古代文化をアクスムを中心に簡単に紹介したい。ただ私は考古学も歴史学も専門でないので、本稿はこれまでの研究の蓄積のごく簡単な、そしてランダムな紹介に過ぎないことをあらかじめお断りしておく。末尾に基本的な文献を挙げておいたので、興味をもたれた方はそれらを参照していただきたい。<sup>(註1)</sup>

## 2. 現在のアクスム

アクスムは2つの小山—東にマイ・コホ（町から80mの高さ）、北にベータ・ゲオルギース（同じく150m）—の間の谷にあたる土地に発展した町で、北から南にマイ・ヘツジャ川と、西にもう一本マイ・ラフラハ川が流れている。アクスムという地名の語源については、*ak*（クシ語で「水」）+*sum/shum*（エチオピア・セム語で「首長」）、すなわち「首長の水」とする説があるが、確かなことは分からない。<sup>(註2)</sup> なお、「水」を表す語は、北のエチオピア・セム語ではマイ *may* であり、こちらの要素をもった、マイ・シューム *May Shum* 「首長の水」という地名もアクスムにある。マイという要素を持った地名はアクスムに何十と有り水資源に恵まれていたのであろう。

さて、アクスムはエチオピア北部ティグレ州にあり、メネリク2世の軍隊が1896年イタリア軍を敗北させたアドワの町の西北西約20km、紅海からは内陸に約160km入った、東経38°43′北緯14°08′に位置する。紀元後1世紀に著された『エリュトウラー海案内記』（文献15）によれば、アクスム王国の紅海岸の港アドリスからは8日の道のりだと述べられている。西への

道はナイル川に注ぐタッカゼ川を渡って、17世紀からの都であった Gondar に至る。内戦のさなか、この川にかかる橋が落とされ、通行不能になっていたが、筆者が訪れた時期に新しい橋が完成し、アジス・アベバからテレビ局が取材にやってくる。標高は2130mで、アジス・アベバと比べると300mほど低いせいか、やや暑く感じられる。人口は1976年の統計で約1万7千人で、住民のほとんどはティグレ人であり、聞かれる言葉、看板・掲示などすべてがティグリア語である。民家は典型的なエチオピア北部の造りであり、石が周壁などに多く使われている。エチオピアでは町を歩いていると、「ファランジ、ファランジ」と子供達にはやされることが多いが、ここでは「バビニ」あるいは「バビニ」と言われる。おそらくはイタリア語の *bambini* 「子供達」に由来する言葉であろう。イタリア・エチオピア戦争の最初期に、イタリア軍はマレブ川を渡ってエリトリアから侵入し、1935年10月からこの町を占領していたのである。

アクスムは、かつてはアフリカの古都として多くの外国人を迎えたが、エチオピア中央政府へのティグレ人民解放戦線(TPLF)などの活動が活発になるとともにその姿も見られなくなった。政府軍の空爆も何回かおこなわれ、新しいマルヤム・ツィオン(シオンの聖マリア)教会の屋根などにその爆撃の痕が見られるが、それ以外には内戦の傷跡らしきものは見あたらない。社会主義体制下では私たち外国人は首都近郊以外へは旅行許可が必要であり、エチオピア人自身も移動を制限されていた。特にTPLFやエリトリアの解放組織の活動が活発なティグレ州、エリトリア州(現在はエリトリアとして独立)へはほとんど行くことはできなかった。しかしTPLFを中核とするエチオピア人民革命民主戦線EPRDFが1991年5月にメンギスツ政権を倒してからは、この制限も取り除かれ、足の便さえあればどこへでも行けるようになったのである。外国人観光客も少しずつ訪れているし、エチオピア人も自分たちの由緒ある最古の町を見ようとやってくるのことである。私たちが奈良を目指すのと同じであろうか。こうした事情の好転があって私のアクスム詣が実現した訳である。なお、冒頭に書いたように、アジス・アベバとアクスムを結ぶ便が、現在毎日1便運行されている。ただし、アジス・アベバでは往路しか予約できないので、アクスムに到着次第帰りの便を予約する必要がある。

### 3. アクスムの歴史

エチオピアでの最も古い文字資料は南アラビア文字で記された一群の資料で、これら及び考古学的発掘から紀元前5世紀ごろには、南アラビア文化の強い影響を受けた文化が、エチオピア北部およびエリトリアにあったことが知られている。この時代を先アクスム期 *pre-axumite* と呼ぶ。主要な遺跡は、エチオピア、ティグレ州のイエハやハウルティ(アクスム近郊)、エリトリアのマタラなどである。アクスムから50kmほど東のイエハでは、最古の神殿跡や墓所が知られている。遺物としてはブロンズ製品(鎌、斧、ライオンや牛をかたどった動物の像)、黒や赤の土器製品などが出土している。刻文からは5-4世紀頃の独立した王国の存在が窺われるが、紀元前3世紀以降の様子については良く分からない。

その後、紀元後1世紀頃、北部エチオピアに王国が形成された。この王国はアクスムの町を中心にしていたのでアクスム王国と呼ばれる。アクスムの名はエチオピアの資料では紀元200年頃のものと思われる、ブロンズ製の奉納品の刻文中に *gdr/ngs/'ksm/* (以下略) 「アクスムの王GDR」と初めて現れる。ここでは先アクスム期と異なり、南アラビア文化の影響を脱して独自の文化が発展した。アクスム王国は、メロエ、ベジャなど周辺を征服しさらに紅海をわたって南アラビアまでに勢力を及ぼし、象牙、犀の角、亀甲、金、カバの皮、スパイスなどを輸出する紅海貿易で

利を得た。盛期を迎えるのは4世紀前半のエザナ王の治世からで、この時期にキリスト教を受け入れ、また今日エチオピア文字といわれる文字体系の完成も見た。<sup>(註3)</sup>以後カレブ王の時代(6世紀)にかけて栄えるが、イスラム勢力の伸張、紅海貿易の衰退などによって7世紀以降衰え、10世紀までには滅亡してしまう。

エチオピアの建国伝説である『ケブラ・ナガスト』(『王達の栄光』)では、イスラエルのソロモン王と、サバ(シバ)の女王との間に生まれた子であるメネリク1世が、モーゼの契約の箱をエルサレムからアクスムに持ち出したとされているのであり、アクスムのマルヤム・ツィオン教会には今なおこの契約の箱が安置されているという。多くの皇帝の戴冠式もここで執り行われ、ツィオン教会の長にはネブラ・エド(「手が(頭に置かれて)聖別された者」の意味)という称号が与えられ、アクスムはそれ以後も宗教的な中心地としての地位を確保し続けたのである。

こうしたアクスムへの言及は同時代の種々の文献にみられるが、後世のヨーロッパ人の手になるものでは、1520年から6年間エチオピアに滞在したポルトガルのカトリック宣教師アルヴァレスによる、貴重な記録(文献1)中に、アクアシュモという名でこの町の様子が記されている。<sup>(註4)</sup>

スコットランド人の旅行家ジェームス・ブルースは1770年1月アクスムを訪れ、40本のオペリスクがみられるとし、一本のスケッチを残した(文献4)。またヘンリー・ソールトは、1805年と1810年の2度ここを訪れ、エザナ王の碑文(ギリシャ語)のコピーやゲエズ語碑文のコピーをとった。(文献14)

#### 4. アクスムの発掘

これ迄知られているアクスム期の遺跡は約40地点に上り、東西160km、南北300km(北緯13°~17°、東経30°~40°)の範囲に分布するが、以下では話をアクスムに限定する。

アクスムの王碑文がいくつかまとめて発表されたのはシオドア・ベントによって(文献3)であるが、本格的な発掘は、ドイツのアクスム調査団によって初めてなされた。著名なオリエントリストであるエンノ・リットマンを団長とし、建築家のテオドール・フォン・リュプケ、同じくダニエル・クレンカーそれに医師のアーヒ・カシュケの総勢4名からなるチームは、エチオピア皇帝メネリク2世からの依頼を受けたドイツ皇帝の命をうけ、アクスムを中心に1906年1月から3カ月間調査をおこなった。この調査は主に遺物、碑文の調査であるが、それだけにとどまらず、言語学・民族学的調査、音楽の録音、写真撮影を行い、多くの写本も収集された。この成果は1913年に刊行され、以後の研究の基となった。なお、この第4巻目はリットマンによる詳細な碑文の研究にあてられている。(文献10)

しかし、それ以後は1930年代にイタリア人による調査がなされただけで、本格的な発掘調査は1950年代になって、新たにフランスの助力で創られたエチオピア考古学研究所による調査まで待たなければならなかった。そして1950年代から1960年代にかけて、アンリ・ドゥ・コンタンソンやフランシス・アンフレ等によって発掘がなされた。1972年から1974年にかけてはネヴィル・チティックの率いるイギリス隊(文献5、12)、ランフランコ・リッチのイタリア隊、ジョゼフ・マイケルスのアメリカ隊の発掘がおこなわれた。しかし、1974年の社会主義革命後は内戦の激化もあり、発掘は中断され20年の空白が続いた。この間の収穫はいくつかの重要な碑文が偶然発見されたことである。1991年の社会主義政権の崩壊後状況は変わり、昨年筆者が訪れた際には、ルドルフォ・ファットヴィッチを中心とするイタリアのチームが、ベータ・ゲオルギースで調査をおこなっていた。アクスムはいわば町全体が遺跡であるから、まだまだ未知の部分も多くあり、今後の

発掘の進展が期待される。

## 5. アクスムの主な遺跡など

### 5. 1. ステレ群

アクスム文化の特徴の一つは巨石文化であるが、最も目立つのが、大きな石柱―ステレ―である。これらは花崗岩の一枚岩でできており、かなりの数が見られる。中でもアクスムの町の中心部から北へ道をたどっていくと、現在ステレ・パークと言われている場所があるが、ここに大きなステレが集中している。ここではドイツ隊が78本を記録しているが、イギリス隊によって地中に埋まったものも含めて、更に41本が確認された。かつてはここにも民家が多くあったようだが、後にこれらの民家を移転させ、現在のような姿に整備されたのである。

ステレには直立しているものと、地面に横たわっているものがあるが、前者で今日最も高いものは21mあり、後者のなかでは全長33、5mのものが最大であるが、これは推定500トンの重量があり、立っていたものが倒壊したものである。近くで見るとその重量感に圧倒される。直立しているものはみな全て南南東に向けて建てられている。なお、全長24mの、3番目に大きいステレは、イタリア―エチオピア戦争中の1937年、イタリア軍によってローマに移された。エチオピア政府は返還を求めているが実現はされていない。

ステレ・パークのうち6本には高層の建物を模して何層のも、扉、窓などの装飾が浮き彫りにされており、頭頂部が半円形になっている。ここにはおそらく何らかの宗教的シンボルがつけられていたと思われる。それ以外は装飾はないものの表面がなめらかになっているもの、また荒削りのままのものなどある。建造年代については、大部分がキリスト教化以前の1世紀から3世紀末／4世紀初めのもと考えられている。なお、アクスムのステレで碑文の刻まれているものはないが、マタラやアンザでは文字の刻まれたものが見られる。これらの石材は、アクスム西郊4―5kmにある、ザラ山の麓のゴブデラから伐り出し、大がかりな人力を動員して運ばれたと推測される。

ステレはゴンドルに至る道沿いの、グディット（アクスム王国を最終的に滅ぼしたとされる伝説上の女王名、ユディットとも言われる）のステレ群と呼ばれる一帯にも多く見られる。野原に100本あまりのステレがニョキニョキと立ち、あるいは横たわっている風景には、一種異様な感じを受ける。ただ装飾を施したのも一本だけで、あまり大きいものもない。低い石積み部分が部分的に残っているが、かつてどのような場所であったか、はっきり分かっていない。この場所では地表に多くの陶片が散らばっていて、雨の後などでは、現在でも貨幣が見つかるそうである。<sup>(注5)</sup>ただし、当然のことながら、こうしたものの持ち出しは厳しく制限されており、アクスム空港で出発時に徹底的に検査され、見つければ没収される。ただ、飛行機を利用しない場合は何のチェックも無い。

### 5. 2. 建物の遺構

リットマンの調査団によって、アクスムの西にある、エンダ・ミカエル、エンダ・セムオン、タアカ・マルヤムの大きな、王宮かそれに準ずる大邸宅の跡と考えられる遺構が調査された。これらは正方形あるいは長方形の石造りの建物で、中央の建物の回りに中庭があり、その外周に方形の建物があるという構造を持っている。現在でもその様子が良く分かるのが1966年から1968年にかけて発掘された、ユディットのステレ群の向かいのドンゲールの遺構で、中核の建物は3000平方メートルあり、中庭をはさんで40室をもつ4つの建物が取り囲んでいる。外周は57m×56.5mのほぼ正方形で、タアカ・マルヤムの120m×80mよりは小規模な造りであるが、高官の館のよう

で、7世紀頃のものだと推測されている。

### 5.3. 墓所

アクスムの北には6世紀のカレブ王とその子ガブラ・マスカルの墓があり、エザナ王の石碑公園の近くには、キリスト誕生当時の王といわれるバゼンの墓なるものがある。ここは地表にステレが立っていて、階段を下りていった地下にある石造の墓である。直ぐ近くには、岸壁にほられた4つの洞窟がありこれもなんらかの墓所であるかもしれない。

ステレ・パークには最大のステレに隣接した大きな一枚岩（縦17m横6.5m厚さ1.3m）の舞台があり、ネファス・マウチャ「風の出口」と呼ばれてきたが、これもその後の発掘によって、地下墓室の屋根部分であることが分かった。またこれ以外にも、ステレと同様に石に扉を刻んだ「偽扉の墓」と呼ばれるものや、煉瓦製の馬蹄状アーチをもつ墓室や、そのほかの地下墓室が明らかにされている。こうした所からは、人骨や貨幣、陶器などが発見されたが、多くは既に盗掘されていた。これらから、ステレがアクスムの王達の墓所のシンボルであることが確認された。

### 5.4. マルヤム・ツィオン教会

この教会は4世紀に建てられたと言われるが、16世紀半ばのイスラム勢力の侵入によって破壊され、現在は17世紀半ばにファシリデス王によって再建された教会と、1965年ハイレ・セラシエ皇帝が建てた新しい教会がある。最古の教会については、先に挙げたアルヴァレスの旅行記にその姿が記されている（旅行記第38章）が、現在は礎石部分が残されているだけであり、発掘も部分的に行われただけである。この教会の前には王の戴冠式の際に天幕の支柱として使われた4本の石柱と、石で造られた王の玉座、聖職者達の座席が残っている。

教会が、ステレ群と向かい合わせの場所に建てられたということは、死者の魂をまつ場所が、キリスト教化後もそのまま継承されたことを示して興味深い。

### 5.5. アクスム博物館

教会の近くに小さな平屋づくりの博物館があり、アクスムおよびその近くで発掘されたものを中心に展示してある。入口を入った第一室には、南アラビア文字およびエチオピア文字で刻まれた、先アクスム期および、アクスム期の碑文が置かれている。最古の碑文の一つであるアッディ・セグラメン碑文や4世紀のエザナ王碑文などが見られる。そのほかには陶器やブロンズの日常用具類、人間の頭部像、装飾品などが展示されている。ただし、説明は一切無いし、常時開館しているわけでもないので、観覧する際には注意が必要である。写真撮影に関しては何も制限されなかった。先アクスムからアクスム期にかけての資料は、展示品に関する限り、アジス・アベバの国立博物館よりもこちらのほうがずっと多くある。

### 5.6. エザナ王碑文

エザナ王の碑文で最も有名な、高さ247cmの花崗岩の両面に、ゲエズ語（リットマン報告書の碑文番号DAE6, DAE7）とギリシャ語（DAE4）で、北方のベジャの民との戦いを記した石碑は、アドワの町からの道がアクスムに入るところの小公園（エザナ公園と名付けられている）の中に立てられた小屋の中に納められている。かつてはもう少し離れた場所にあったのを、イタリアが占領期に小さなステレ、ステレの先頭部分などと共にそこに移したものである。この小屋は鍵がかかっ

ており、ガードマンがいる時でないとは碑文を見ることはできない。エザナ王碑文はそのほかには前項であげた博物館および、マルヤム・ツィオン教会の倉庫の中に置かれている。

## 6. 参考文献

以上で挙げなかった文献を少し記しておこう。エチオピアの古代史、ならびにアクスムについては、新しい2書(文献2、14)がある。文献2の著者は、長年エチオピアで考古学調査に携わった人であり、文献14の著者はチティックの発掘に参加した、古銭学を主領域とする研究者である。文献9はロシア語の著書の翻訳であるが、資料の扱いに関して問題があると思われる。ただ、マイケルスによって付された発掘史の概観は有用である。エチオピアの考古学研究所による調査報告はアジス・アベバで発行されている雑誌 *Annales d'Ethiopie* (不定期刊) などに、また、イタリア隊の報告は主に雑誌 *Rassegna di Studi Etiopici* (年1冊、ローマ、ナポリ) 上に発表されている。

アクスムのステレの研究には多くのものがあるが、中東、アフリカの類似の建造物と比較研究したものに文献8がある。ここではスーダンのステレとの共通点に注目し、アクスム文化のアフリカ的(より狭くいえば、スーダンからエチオピアにかけての地域的)特徴が見られるとの仮説を提出している。同著者には先アクスム期の土器の研究もある(文献7)。

アクスムの地誌については文献11が詳しく、古代からのさまざまな文献に見られるアクスムの記述が概観できる点でも便利である。

日本における古代エチオピア史の研究は、まだ緒についたばかりと言っていい状態であるが、文献17-19をはじめとする、東京大学の藤勇造氏による、アクスム期のエチオピアと南アラビアとの関係についての優れた諸研究がある。アクスム期の碑文資料、および先アクスム期の言語状況について筆者は論じたことがあるが(文献20、21)、この点に関しては文献4が刊行されて、両時期の言語資料が容易に参照できるようになった。この文献では碑文は基本的に発見地ごとにまとめて、それぞれに関して、概説(記されている材料、文字の大きさ、所在地、これまでの報告など)、テキストの転写、それに場合によっては、コメントリーが付されている。ちなみに碑文番号は先アクスム期のものが碑文番号1-179、アクスム期のゲエズ語碑文が180-268、同じくギリシャ語碑文が269-286、言語不明のものが287となっている。(モノグラムや印章、陶片に数文字記されたものなどは除いてある)

### 文献表：

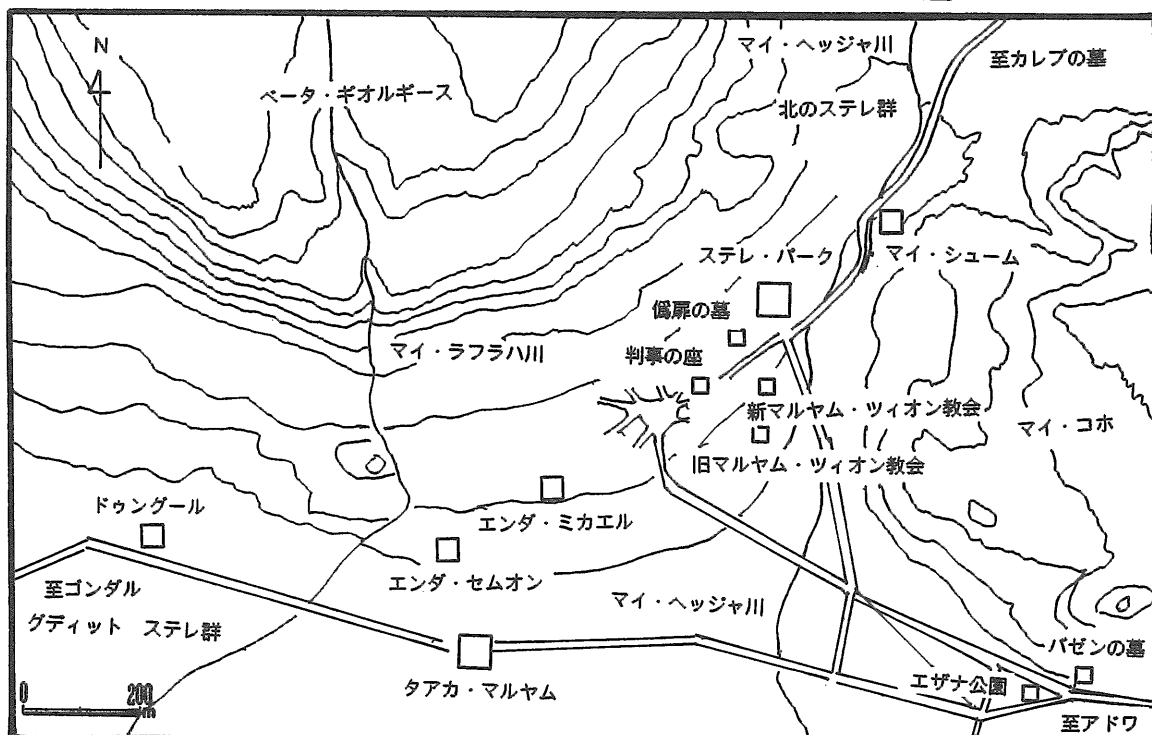
- (1) Alvarez, F. (1540), *Ho Presta João das Indias*. Lisboa.  
(池上岑夫訳、長島信弘注・解説『アルヴァレス：エチオピア王国誌』 岩波書店、1980年)
- (2) Anfray, F. (1991), *Les anciens Ethiopiens*. Paris.
- (3) Bent, J. Theodore, (1893), *The Sacred City of the Ethiopians*. London.
- (4) Bernand, E., Drewes, A. J., Schneider, R., (1991), *Recueil des inscriptions de l'Éthiopie des période pré-axoumite et axoumite*. Paris.
- (5) Bruce, J. (1790), *Travels to Discover the Source of the Nile in the Years 1768, 1769, 1770, 1771, 1772, and 1773*. Edinburgh. Vols I-V.
- (6) Chittick, N. (1974), 'Excavations at Aksum, 1973-4; A Preliminary Report', *Azania* IX, pp. 159-205
- (7) Fattovich, R. (1980), *Materiali per lo studio della ceramica pre-aksumita etiopica*. Napoli.
- (8) Fattovich, R. (1987), 'Some Remarks on the Origins of the Aksumite Stelae', *Annales d'Éthiopie*,

- (9) Kobischanov Y.M.(1979), *Axum*. Translated from the Russian version (1966) by L.T. Kapitanoff and edited by J.W.Michels. University Park and London.
- (10) Littmann et al.,(1913), *Deutsche Aksum-Expedition*. Berlin. Bd.I-IV.
- (11) Monneret de Villard,U.(1938), *Aksum,Ricerche di Topografia Generale*. Roma.
- (12) Munro-Hay,S.C.H.(1984), *The Coinage of Aksum*. New Delhi.
- (13) Munro-Hay,S.C.H.(1989), *Excavations at Aksum*.
- (14) Munro-Hay,S.C.H.(1991), *Aksum: An African Civilization of Late Antiquity*. Edinburgh.
- (15) Salt,H.(1814), *A Voyage to Abyssinia and Travels into the Interior of that Country*. London.
- (16) 『エリュトゥラー海案内記』 村川堅太郎訳注。昭和21年 生活社。復刊1993年,中央公論社。
- (17) 藤勇造(1984),「古代南アラビア碑文に現れるアビシニア人」,『日本オリエント学会創立三十周年記念オリエント学論集』、刀水書房。pp.279-295.
- (18) 藤勇造(1990),「古代南アラビア碑文に現れるアビシニア人 (二)」,『日本オリエント学会創立三十五周年記念オリエント学論集』、刀水書房。pp.193-213.
- (19) 藤勇造(1994),「アドゥーリス紀功碑文の新解釈」, *Journal of East-West Maritime Relations* (東西海上交流史研究) Vol.3,pp.73-114.
- (20) 柘植洋一(1983),「エチオピアの碑文資料」,『オリエント』第26巻第2号,pp.131-159.
- (21) 柘植洋一(1993),「エチオピアにおける南アラビア碑文について」,『オリエント』第36巻第1号,pp.71-88.

注：

- (1) 本稿は、1993年10月9日と10日にわたって金沢大学で開催された、「インド洋の海上貿易ーアジアの大航海時代を語るー」というシンポジウムにおいて、筆者がスライドでアクスムを紹介した内容をまとめたものである。その際及び今回の執筆の機会を与えてくださった、金沢大学文学部考古学研究室の佐々木達夫先生に感謝申しあげる。
- (2) ハムタ語 aqua、南アガウ語 aqu、ハミル語 auq、クワラ語 axu  
ティグリニア語、アムハラ語 shum
- (3) エチオピア文字は南アラビア文字から発展したもので、当初は子音のみを表記したが、エザナ王の時代に日本語を表記する仮名のように、一文字が子音+母音をあらわす体系となった。
- (4) この記録は、アフマド・グラニュー率いるイスラム勢力による北部エチオピアの大破壊以前の状態を伝える点で極めて重要である。
- (5) 貨幣についてはマンロー・ヘイの研究によれば、270年頃のエンドゥビス王から、4、5世紀にわたって金、銀、ブロンズの貨幣が造られたという。ただ、最後の貨幣がいつ頃鑄造されたかについては、まだ多くの問題が残されており、はっきり分かってはいない。(文献2、12、14などを参照のこと)

先阿克苏ム期・阿克苏ム期の遺跡 (文献2による)



阿克苏ム (文献6による)

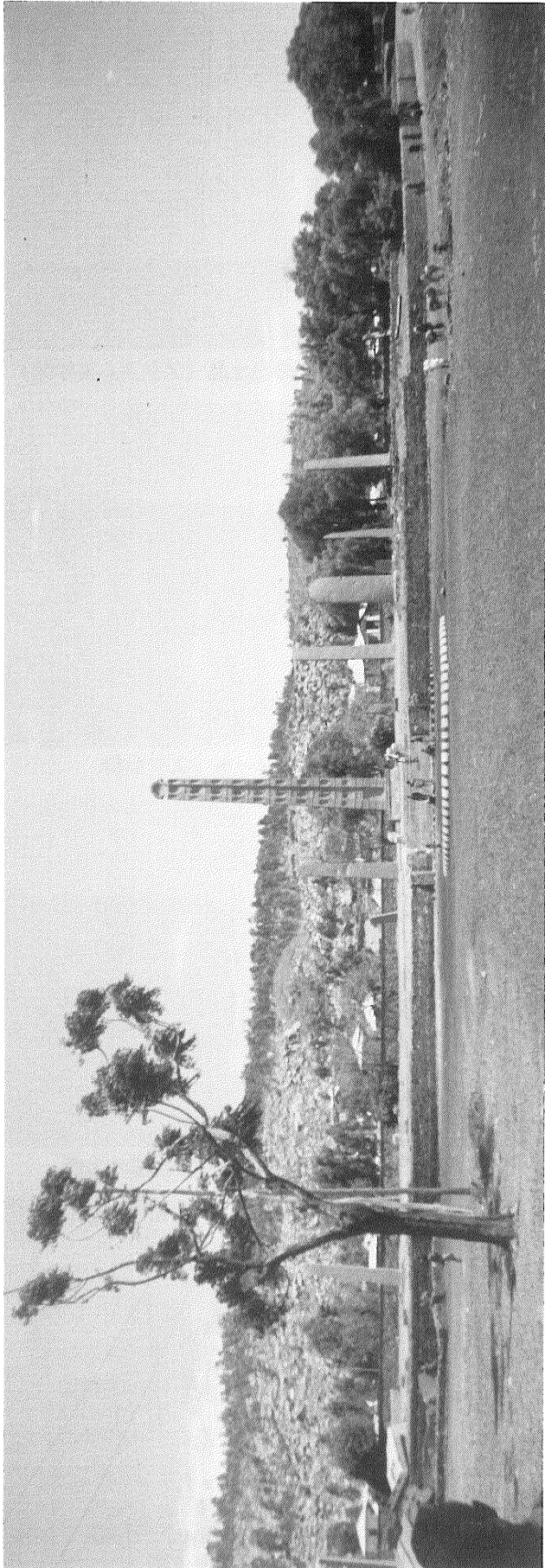


写真1 ステレ・パーク全景

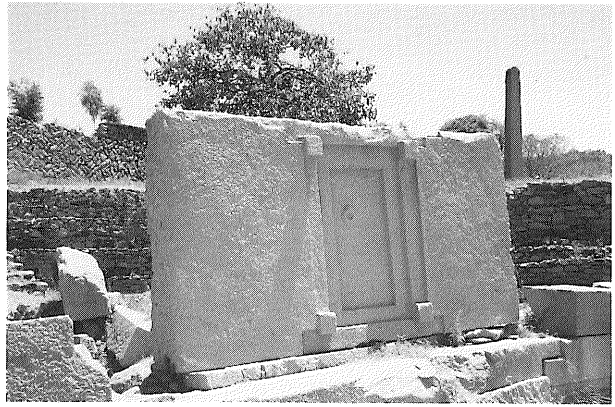


写真2 偽扉の墓 (ステレ・パーク西)



写真3 倒壊した最長のステレ



写真4 ネファス・マウチャ  
(向かって右に新マルヤム・ツィオン教会)

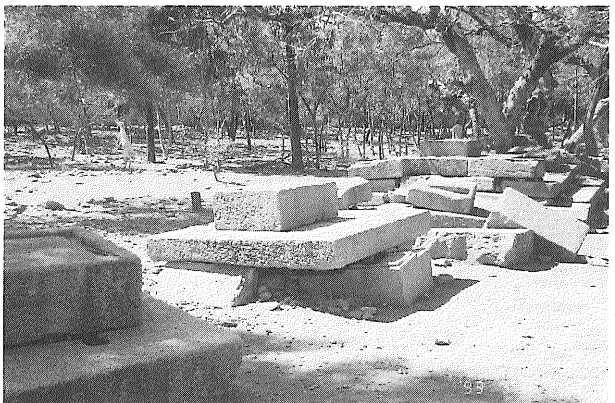


写真5 判事の座 (旧マルヤム・ツィオン教会前)

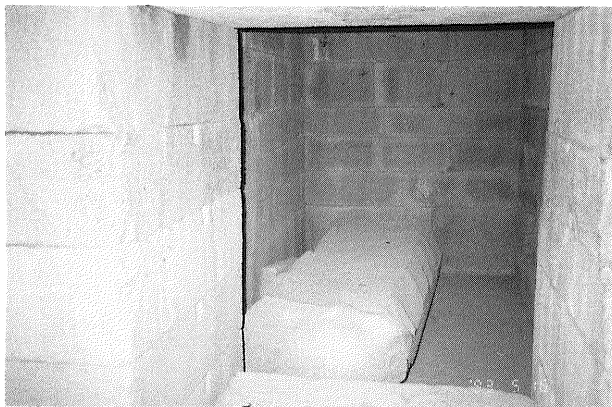


写真6 地下墓室 (ステレ・パーク)



写真10 人頭像などの出土品 (アクスム博物館)

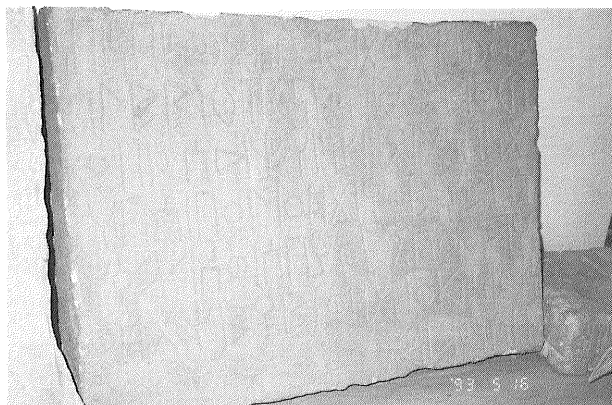


写真7 アッディ・セグラメン碑文  
(先アクスム期最古の碑文の一つ。アクスム博物館)

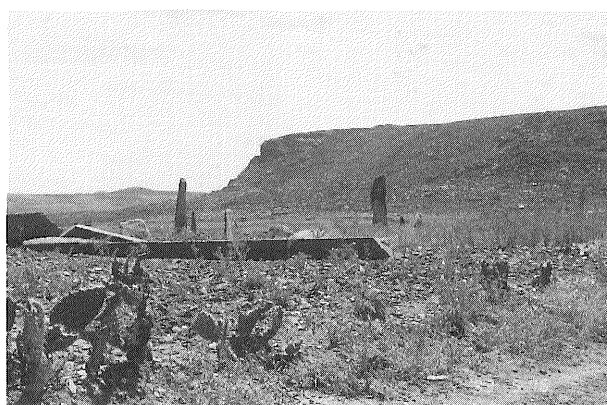


写真11 グディット ステレ群

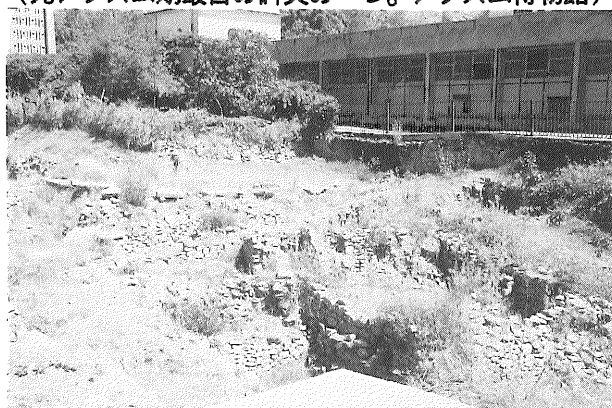


写真8 アクスム期のマルヤム・ツィオン教会の礎石部分



写真12 ドウングールの大住居の遺構

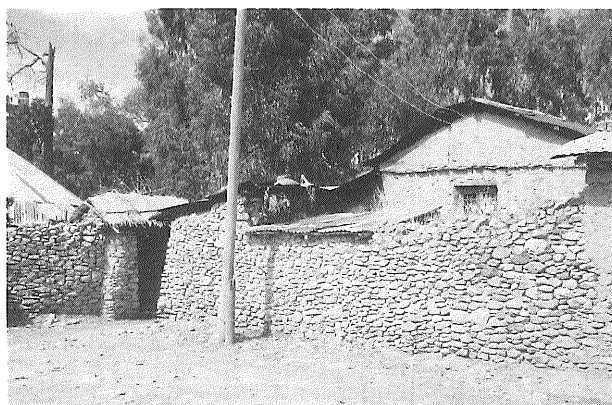


写真9 アクスムの民家



写真13 エザナ公園  
(左側の小屋にエザナ王碑文を刻んだ花崗岩が立てられている)